

# 福島県立安積高等学校

## 第130期生卒業証書授与式 式辞

日 時 平成29年3月1日（水）10：00～

場 所 福島県立安積高等学校第一体育館

式 辞 本日3月1日は旧暦2月4日、まさに春立つ日の（アドリブで追加）

柔らかく春めいた陽射しが学舎に降り注ぐようになり、ここ安積野の大地にも少しずつ躍動の気が満ちてきた今日の佳き日に、福島県議会議員代理者であります県議会議員 勅使河原正之様を始め、御臨席いただきました御来賓の皆様方に、卒業生の前途を祝福していただき、本日、第130期生卒業証書授与式を挙行できますことは、卒業生はもとより、職員・生徒一同、この上なき喜びと感じており、心から感謝申し上げます。

保護者の皆様には、卒業式に臨むお子様の晴れ姿を御覧になり、お喜びもさぞかしのことと、心からお祝い申し上げます。また、これまで本校教育の推進に、御協力、御支援を賜りましたことに改めて感謝申し上げます。

卒業生の皆さん、卒業おめでとう。皆さんは、3年間に亘る安積での学びの時を過ごし、栄えある安積の130回目の卒業生として巣立つことになりましたが、皆さんが飛び込もうとしている社会は、東日本大震災後の厳しい社会です。

6年前の3月11日、皆さんが小学校卒業を約10日後に控えた日に発生した大地震・大津波と、それに続く東京電力福島第一原子力発電所の事故は、多くの日本人の価値観を変えるほどの大変な出来事でした。事故発生当時とその後の事情については、皆さんそれぞれ異なっていると思いますが、大震災は皆さんの学校生活に何らかの影響を及ぼしてきたと考えられます。

大震災、原発事故から6度目の正月を迎え、あと10日で丸6年が経過しようとする中、本県の復旧も少しずつ進んでいるように見えますが、避難者の数は、2012年のピーク時の約16万5000人から半減したとは言え、今なお約8万人の県民が避難生活を継続しており、本県の多くの児童生徒が、未だに県内外で避難生活を余儀なくされている現実があります。復旧が進んだ部分もある一方、廃炉・汚染水対策、風評被害と風化という二重の逆風が吹くなど、様々な課題が山積し、福島県は真の復興に動き出しているとは言えない厳しい状況が続いています。

大震災以降、「ふくしまのために何かをしたい、ふくしまの復興に自分の学びを活かしたい。」このように考える頼もしい高校生が増えています。勿論、世界へ飛躍しようとしている生徒も大勢いるわけですが、その場合でも、「3.11以降のふくしま」を心にとめ、決して風化させることなく、できれば、ここ福島の大地にしっかりと足をつけて活躍してほしいと願っています。

卒業生の皆さんは、学校創立130周年という記念すべき大きな節目の年に入学しました。そして、同期生と共に安積の時間を刻み、場所・時間や言葉・記憶を共にし、勉学に励み、部活動で仲間の大切さを実感し、紫旗祭で級友との絆を強くして、「安積」という学校文化を3年間共有してきました。まさに、安積の誇り・プライドを身につけたのだと私は考えます。

更に言うならば、安積の精神である「開拓者精神」「質実剛健」「文武両道」を胸に刻み、安積高校という坩堝の中で、仲間と共に時間を過ごしていく内に、他の高校では見られない「自主自律」のスピリッツをベースにした発酵現象が起こり、正確には表現できない何か不思議なもの、生涯効き目が続く安積ブランドの酵素のようなものが安高生の中に醸し出されたのではないかと私は思います。それが端的に表れた一つの例として、昨年度から東京大学と京都大学が初めて導入した推薦入試において、県内で唯一、合格者を1名ず

つ出して、パイオニアたる安積ブランドを全国に発信し、後輩たちに大きな刺激を与えたことを挙げるができると思います。

皆さんは、卒業後も更に多くの人々と出会い、関わりながら生きていくことになります。どうか、奇跡としか言いようがない出会い・巡り会いを大切に、志を高く掲げるとともに、常に謙虚で誠実であることを心がけて歩んでください。開拓者精神、自主自律の安積スピリッツ、そして謙虚な姿勢で進んでいけば、どんなに高い壁が目の前に立ちふさがったとしても、それを乗り越えていくことができるはずです。

また、全国各地にいる大勢の安積OB・OGが、皆さんを支えてくれるはずです。

(アドリブで追加)

私たち教職員一同は、安高生に相応しいのは、安高生「であること」ではなく、真の安高生になるために絶えず何かを「すること」なのだ、ということを経験し、安積の良き校風と伝統をさらに揺るぎないものとする、そしてますます地域に信頼され、「七州の覇者」という名に相応しい安積高校にするために、日々励んでいくことを決意して、皆さんを笑顔で送り出したいと思っています。

私事になり恐縮ですが、私は88期生として安積で3年間過ごし、その後、国語教師として昭和61年から11年間、母校の教壇に立ち、101期・103期・105期・108期・110期の安高生と共に過ごすことができました。そして、不思議な縁に導かれ、私にとって3度目となる安積に、校長として着任したのが卒業生が入学する1年前でしたから、私は129期生と130期の卒業生の皆さんと共に3年間を過ごしました。そして、私自身も、130期生と共に安積を卒業し、この3月末で37年間の教師生活に終止符を打つことになります。その意味で、今年の卒業式は、私にとっても非常に感慨深いものがあり、私ほど幸せな男はいないと思っています。

ところで、皆さんは、2年前の130周年記念式典の校長式辞の中で、近代短歌を切り拓いた浪漫派の歌人、与謝野晶子が詠んだ短歌を引用したことを覚えているでしょうか。

劫初よりつくり営む殿堂に われも黄金の釘一つ打つ

130期生の皆さんは、安積という130年を超える歴史を持つ大きな殿堂に、釘を一本しっかりと打ち込みました。皆さんが目指すところはそれぞれ異なっていると思いますが、例えば、弁護士を目指すのであれば、法曹界という大きな世界・殿堂があり、医師や看護師であれば、長い歴史を持つ医療の世界・殿堂があるはずです。皆さんそれぞれがこれから飛び込もうとしている殿堂に、皆さん一人ひとりが持っている釘をしっかりと打ち込み、その殿堂をより高く、より大きくしていく、という気概を持って歩いてください。

終わりに、卒業生の皆さんの前途洋々たる未来を祝福し、皆さんが、安積の誇り・プライドと、一本筋の通った信念を胸に秘めながら、卒業後何年が経過しても、校歌や紫の旗のゆく所を声高らかに歌い、自分の人生を切り拓いて、皆さんそれぞれにとっての「覇権の剣」をしっかりと握ることを心から念じて式辞といたします。

平成29年3月1日

福島県立安積高等学校長 久保田範夫